

# 5,000年後に贈るカプセル

## テレビ、爆発的普及の秘密

正力  
社主

中間子理論とその発展 湯川博士  
ロケット開発と宇宙観測 糸川博士

### 日本の記録、アメリカへ



正力社主



湯川博士



糸川博士

一七世紀の人類から五千年後の世界への贈り物。タイム・カプセルに、日本の文化遺産としてなにつめるか。カプセル封入員選定の地域委員、正力松太郎読売新聞社主、湯川秀樹博士（京大）糸川英夫博士（東大）の三氏は、さる五月にそれぞれ後世に残る「現代の記録」の内容を検討していたが、このほど作成を終了、ニューヨーク市の選定中央委員会へ送付するばかりになった。正力社主は「今世紀の奇跡ともいえるべき日本におけるテレビの爆発的普及の秘密」湯川博士は「中間子理論とその発展」糸川博士は「アジア、とくに日本のロケット開発と宇宙観測」のテーマをとり上げ、それぞれスライド、写真なども現状を伝えている。これらはさらにマイクロフィルムにうつしかえられ、魚雷型のカプセルの中で五千年眠り続けるが、五千年後、このカプセルが開かれる時、現代、はたして評価されるだろうか。

タイム・カプセルの地下埋没は、さきに開かれたニューヨーク世界博覧会の記念行事で、こんどが第一号。アメリカのウェスタン・インク社が主催し、一九三八年のニューヨーク世界博覧会のさいも当時の記録や品物をつめた第一号カプセルを埋め、六九三九年におけることになっていた。しかしその後第二次大戦、国連の成立、とくに科学の驚異的な進歩により、第一号の届目補充として、さらに第二号が必要となった。カプセルの最終選定はアメリカの中央委員会

5,000-

「日本がまた大戦後の混乱と窮乏にあえぐ一九五一年（昭和二十六年）十月、かねてテレビ事業に着手していたたけは、日本ではじめて正力社主三氏が選出され、それぞれ専門の分野で「報告書」の作成を急いでいた。正力社主（報道通信部門）の論文要旨は



爆発的人気を呼んだ街頭テレビ  
①東京朝日新聞社前 ②東京高円寺駅北口 ③藤沢市銀座通り（いずれも28年秋）

「日本がまた大戦後の混乱と窮乏にあえぐ一九五一年（昭和二十六年）十月、かねてテレビ事業に着手していたたけは、日本ではじめて正力社主三氏が選出され、それぞれ専門の分野で「報告書」の作成を急いでいた。正力社主（報道通信部門）の論文要旨は

後十一年間でアメリカに追いつく世界一のテレビ普及国となった。このころ、これによってエレクトロニクス産業が振興して驚異的な経済復興の要因をなしたばかりか、自由世界、民主主義発展のため日本のテレビの貢献がより強調されている。さらに発足当時のテレビ・スタジオ風景、二百二十か所の街頭テレビ、十一年間の歩みなども写真で紹介している。赤川博士（宇宙部門）のものは「アジアにおける宇宙研究計画」として日本による宇宙研究の進歩という百五十頁におよぶ論文で、この中にはインド、パキスタンをめぐったアジアのロケット開発計画、宇宙観測を説明、なかでも日本のベンシルロケットからラムダ3型、三段ロケットへの進歩、その打ち上げによる宇宙観測、電離層など観測結果のすべてをわしくのべ「宇宙開発時代の二里づかき楽いた」と結んでいる。湯川博士（科学部門）も「中間子理論の展開から物質の本体を究明する最新の論文」を解説、日本ではじめてのノーベル賞受賞の栄誉に輝く中間子理論発表のいき、物質の「本体」を究明し続ける

c073-001-018